# 3歳未満児における保育内容の評価に関する研究 一人的環境・物的環境・言語環境の研究から見えてきたものを土台として一

研究代表者 岩橋 道世 (こども園るんびにい副園長)

共同研究者 平山 猛 (さざなみ保育園園長)

隈崎 哲也 (太陽の子鹿島こども園園長)

青木 恵里佳 (子供の家愛育保育園副園長)

菊地 義行 (境いずみ保育園理事長)

只野 裕子 (こども園あおもりよつば園長)

福澤 紀子 (こども園つるた乳幼児園園長)

永田 久史 (第2聖心保育園園長)

田和 由里子 (春日こども園園長)

田口 侑平 (和田愛児園副園長)

東口 房正 (こども園ふじがお幼稚園園長)

遠藤浩平(門田報徳保育園園長)

椛沢 幸苗 (中居林こども園理事長)

坂﨑 隆浩 (こども園ひがしどおり理事長)

齋藤 奈緒美 (中央保育園主任保育士)

北野 幸子 (神戸大学大学院教授)

矢藤 誠慈郎 (和洋女子大学教授)

# 研究の概要

私たちの研究グループ(保育総合研究会)では、これまで3年間「現場における3歳未満児の教育の質の在り方に関する研究」を行ってきた。現在日本の子育て環境は、3歳未満児の50パーセント以上が保育園やこども園等に入所している状況となっており、各施設が果たす役割は大きい。3年間の研究により、環境が子どもたちの生活に大きく影響することが明らかとなっており、保育施設の環境設定の重要性がみとめられている。

これまでの3年間の研究は、子どもの育ちに研究の視点が置かれていたが、今年度の研究は、過去3年間の研究をもとにこれからの保育の質を高めていくために、保育者が保育を楽しめるように大人の仕事の環境も整えることが必要なのではないかと考え、視点を保育者におき、自分の保育に向き合い自問自答する自己評価を作成し、その使用効果を測ることとした。

過去3年間の研究を踏まえ、保育者が現場に必要な保育に欠かせないであろう評価項目を抽出した自己評価票と評価後のアンケートを作成し、協力園において保育者に記入してもらい、その効果を測った。

保育の合間の短時間で自己評価票に記入するだけで保育が可視化され、園として保育者の充実感や悩みなど に早めに気づいて対応できるため、結果として子どもたちの保育環境が良いものとなるのではないかと考える。

キーワード:・過去3年間の研究

- ・3歳未満児の保育環境 人的環境、物的環境、言葉かけ等による環境
- ・自己評価票1か月12項目→1年間144項目

### 1. はじめに

3歳未満児は乳幼児教育の分野において重要な位置にあり、3歳以降の発達や人間形成の基礎作りに大きな影響を与えるとされている。特に3歳未満児は愛着関係を確立した大人との生活環境から様々な知識や技能を吸収し獲得していくとされ、この時期に信頼できる他者との関わりは、個々の持つ発達のプログラムをより適切に起動させるきっかけとなる。

3歳未満児のとりわけ1、2歳児のおおよそ半数が何らかの保育施設を利用している現状を踏まえると、保育施設における乳幼児が関わる環境の設定の重要性は増している。

保育施設において、子育ての専門家である保育者との愛着と信頼関係に基づいた人間関係や、学びを誘発する生活や遊びの場である良好な環境構成、そして学びや気づきを引き出す子どもに寄り添う言葉かけは、保育施設における保育の中心をなし、日々の保育の中で豊かに提供されなければならないものである。

本研究は、保育施設における3歳未満児の生育環境の重要性を踏まえ、保育現場の環境のあり方を、「人的環境」「物的環境」に加えて、保育者の言語行動を乳幼児の成長を促す環境として捉えた「言葉かけ等による環境」の3分野に焦点をしぼり、過去3年にわたり研究した。本研究で取り上げた3歳未満児の保育は、一人ひとりの子どもの特性を生かし、その発達を援助すると共に、「保育所保育指針」や「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に示されているねらいや育みたい資質・能力、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿等、3歳以上児の保育実践にも有効に繋がるものとして、その重要度を改めて確認することができた。

次の段階として、これらの3研究を現場の保育者自身が明確に認識する上で欠かせないPDCAサイクルの評価システムの重要性に着目し、評価システムの在り方の検討、保育の内容を充実させると同時に、計画に基づいた保育の質の向上を目指し、3歳未満児の保育者の有効な自己評価の開発に取り組むこととした。

個人差の大きい3歳未満児の発達を確かなものと してとらえるには、一人ひとりの発達に注視し、評 価に至るまでの観察や記録、園児への理解等を基に 十分考慮し行われなければならない。

自己表出が未熟である3歳未満児の評価は、保育の専門家としての観察の視点と個々の発達を見極める確かな知識と子ども本来の姿に寄り添う姿勢が重

要になる。そのためにも保育者自身が自己を客観的に捉える自己評価項目が必要になる。

厚生労働省から出ている「保育所における自己評価ガイドライン」に基づき、各方面から様々な評価表が提示されている。また外国で使用されている評価表も紹介されているが、現場が評価の重要性を認識しながら二の足を踏んでいるのは、評価項目の多さである。保育という分野は実に広く、取り上げたい項目は数知れない。しかし、保育現場において、保育をしながら100以上の項目をチェックするのは容易ではなく、評価への抵抗感を持つ原因となる。

当研究グループは、先行の3つの研究を基に、保 育現場に即した評価方法に着目した。できるだけ評 価項目を少なく抑え、評価時期を工夫、記載方法を 簡素化し、保育全体を捉えることができることを目 標とした。その際、評価の基点を月ごととし、月案 作成時に前月の評価をすることで、次月の計画の方 向性が見えるように月ごとの評価方法を検討した。 先行の3研究から評価項目として重要と思われる12 項目を抽出し、その月に、十分にできていたと思う ものに○をつけて行く方法を取った。1か月に12項 目だが年間にすれば144項目を評価したことになる。 また月ごとの保育者自身の成長や変化の様子が見え ることで、保育へのモチベーションも確保できるも のとなる。当研究グループにおける4年度の研究を 通じて、改めて3歳未満児の保育環境の重要性を確 認することができた。今回の研究結果が現場で大い に活用されることを願うものである。

### 2. 研究の目的

### (1) 研究の背景

今回の自己評価票作成に至った経緯について、先 に行った研究の概要、自己評価票作成につながる研 究成果、および自己評価票を作成し実施することで 得られる効果についての仮説について示す。

①これまでの研究と研究の成果 (3つの先行研究) ◎2017年度 (保育科学研究第8巻P45~61参照) ~人的環境中心~

「幼保連携型認定こども園の現場における3歳未満の教育の質の在り方に関する研究」

### 【研究の概要】

3歳未満児の教育の質の在り方を検討し3歳未満 児の教育の重要性の確認、及び3歳未満児の教育に 必要な保育教諭の力量を明らかにすることであった。 同研究の成果としては、保育の実践をビデオ撮影 及びアンケート調査で可視化したことにより、保育者自身が冷静に保育の振り返りができた。また日々の生活の中で見落としや気づきが薄いところなど、今まで園内研修で検討されながらなかなか改善につながらなかった内容が、動画を通して実践内容が保育者の記憶だけではなく、記録での振り返りにつなげられたことも質の向上と専門的知識への広がりにもつながった。人的・物的環境については温かみや安心できる空間、部屋や椅子や机等の環境、雰囲気作り、保育者の暖かい語りかけ、まなざしやしぐさなどの行為、つまり専門的知識を身に付けている人からの教育的なかかわり(教育・保育)など環境設定の重要性についても改めて認識できた。

それは、一般的にスキンシップを主に 0 歳児の養護の側面から 1 歳児を経た 2 歳児の平衡遊びへの支援までを見る機会と共に、今後の「指針」や「教育・保育要領」に書かれている 3 つの視点や 1、 2歳児の 5 領域に関してまでも見る視点として現場では考えられている。それは一言で言えば、 0歳児から教育をする主体であるということ、今回の最大の視点になったという事である。

保育者には保育室等の環境、間取り、彩光、人的配置、遊具の設定、保育者の保育実践内容等々が関係しており、保育者がそれらを丸ごと受け止め、受け入れ、受け流して実践していくことが求められている。ただ保育者は教育・保育以外の業務に追われていることが多く、今後生活空間の豊かさの保障のためには配置基準の検討も必要と考える。

# ◎2018年度(保育科学研究第 9 巻P115~126) ~物的環境中心~

「幼保連携型認定こども園の現場における3歳未満 児の教育の質の在り方に関する研究~遊具環境と遊 びに注目して~」

# 【研究の概要】

2018年度のテーマは、保育環境としての遊具(おもちゃ)が保育現場に適切に配置され、乳幼児の成長を促すものになっていることを確認することと、この場合保育者の関わりも大きく影響することから、平行してその有効性を追求することである。

具体的な内容は、乳幼児の教育環境の重要性をより具体的に示すために、全国の教育及び保育施設においておおむね共通して準備されている遊具としてのおもちゃを抽出し、乳幼児の関わりから見える発達、特に年齢によって関わる遊具(おもちゃ)の種類とその使用頻度、また関わった遊具(おもちゃ)への興味の深さや集中力を知る方法として集中した

時間を測定し、同時に乳幼児の行動観察から発達過程を読み解く保育者の理解度についても実証研究の対象とした。

その結果、保育の中で積み上げてきた保育者の経験値に基づいて用意された遊具(おもちゃ)を研究(実証)した結果として示されており、0歳児からの保育所保育において「教育」が存在していたことを示すこととなった。また、保育者は子どもの育ちに関わる専門職として、「指針」や「教育・保育要領」に基づいて環境を設定しているが、遊具(おもちゃ)による保育環境の設定についても子どもの年齢や発達、子ども同士の関わりを考慮し意識的に行われており、子どもの学びについて読み取っていることが明らかとなった。

保育者は、子どもたちの発達に即した遊具(おもちゃ)をタイミングよく提供することが必要であり、月齢や年齢の差に応じることも大切である。このことから、子どもの成長発達に不可欠な物的環境である遊具(おもちゃ)をどのように提供するかは、保育経験を積み上げた保育者により、個々の子どもに育って欲しい能力や力を把握し計画を立て、実践、評価し次へ生かせるように計画をたて直すというPDCAサイクルを回すことが必要になってくる。そこには保育者の力量がかなり重要になってくるであろう。その事は逆に、主体的、対話的、深い学びについて子どもの遊ぶ様子から学びの姿を読み取り、または読み取ろうとする保育者のスキルが大きく影響することを示してもいるのである。

以上のことは、「指針」及び「教育・保育要領」等に定められている保育の内容、特に今回取り上げた3歳未満児における教育及び保育について、乳児期のねらいである「身近なものと関わり感性が育つ」から、満1歳からの5領域の「ねらいと内容」へのつながりについて、保育者は子どもの遊びの中に、主体的、対話的、深い学びにつながる姿を、その時々の子どもの状態を把握し、遊具を用いて遊びを促し、子どもの様子から育ちを読み取っていることを示唆するものである。

# ◎2019年度(保育科学研究第10巻P67~P82)

### ~言葉かけ等による環境~

「人的環境としての保育者の語彙力と子どもの育ちの関係性についての実証研究~言葉のやり取りを通して見えてくるもの~」

### 【研究の概要】

2019年度の研究では、日々の保育の言語環境について保育現場における保育者と子どもの関係性の現

状を把握し、言語発達により良い影響を与える保育者の質と保育の質の在り方を検証していき保育者の言語行動が乳幼児の成長を促すものになっていることを確認した。

子どもの言葉の発達は保育者の言葉を始め、関わり方に大きく影響されることを確認し、保育者がかける言葉は子どもの言動にどのようにアプローチしているのかを例を挙げて確認することができた。

0歳児への言葉かけへの反応は非言語でのものが 多い。その非言語的な活動の中には育ちが見られ、 その内容は、仕草、表情(笑顔)、認識、動作、等 に見ることができた。

1歳児との関わりでは、「子ども一保育者」「子ども一保育者一子ども」へと遊びが展開していく様子が窺え、保育者との関わりで、さらに非言語行動の増加が見られ、2歳児においては、やりたいことを真似する行動(非言語活動)遊びの回数を重ね、保育者の関わりを深化・発展させることを通して、子どもの言語行動は大きく成長するのではないかということが考えられた。「子ども一保育者」関係による言葉の増加が「子ども一保育者一子ども」関係に広がる基盤となっていることが示唆される結果となった。

また、未だ言葉を獲得していない状態の 0 歳児から次第に言語活動に移行していく 2 歳児において、保育者の言葉かけを通して言葉の獲得につながっていることが明らかとなった。言葉では応答できない 0 歳児であっても、同じ遊びの繰り返しの中で保育者による言葉かけを受け続ける体験の積み重ねから次第に言葉の萌芽が現れてくることが 3 回の遊びの展開から見えてきた。

本研究を通して、「人的環境としての保育者の語彙力と子どもの関係」において語彙力を広げていくためには0歳からの保育者との言葉のやりとりの積み重ねが重要だということが現場の実態調査から実証できた。

### ②研究成果と質の向上について

2017年度の研究からは、新たな0歳児からの教育の視点の重要性が見いだされた。

改訂された「指針」及び「教育・保育要領」においては、3歳未満の保育の重要性が示されている。乳児(0歳)には「健やかに伸び伸び育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものと関わり感性が育つ」と3つの視点が示され、更に満1歳~3歳未満の5領域と3歳以上の5領域とのねらい・内容について年齢ごとに考慮されている。これらのこ

とは日々の保育の実践の中で一人ひとりの子どもたちが螺旋を描くように成長し、その積み重ねが認知能力や非認知能力として備わっていくものと考えられる。3歳未満児までにおける思考や理解の根底がその後の成長・発達、つまり「生きる力」の根底でもあるといえるだろう。今後は改訂された「指針」及び「教育・保育要領」の内容を基に保育計画からの実践をカリキュラム・マネジメントの重要性を鑑み、よりよいカンファレンスの在り方やどのような環境設定をすべきか、またその教育の主体である園児への支援の仕方など探っていくことが必要であるし、研修等も含め検討して明らかにしていきたいと考えている。

人間の生まれつきの才能を否定しないが、しかし才能は環境によって変化する(医学的に遺伝子は変わらないが、遺伝子が働く際のプロセスや機能は環境によって変わる。例えば学習・技能・考え方は遺伝の影響を受けにくいと言われている)。そのことも再認識できたのではないかと考えた。

2018年度研究からは、環境構成の中で遊具の位置づけや保育実践や記録の内容の充実が必要であることが認められ、とりわけ主体的・対話的・深い学びへのつながりが重要であることがわかった。今後の課題として、環境構成の中で遊具の位置づけや保育実践や記録の内容、子どもの姿を職員間で情報共有など、評価システムの構築に必要な項目のさらなる実証的研究、具体的には子どもと子ども、子どもと保育者とのやりとりを目に見える形で明らかにすることや、保育者はどのようなねらいで遊具(おもちゃ)を使用しているかについて明らかにしていきたい。

最後に2019年度研究からは、環境構成の重要性を 指摘できる。本研究を通して、「人的環境としての 保育者の語彙力と子どもの関係」において語彙力を 広げていくためには0歳からの保育者との言葉のや りとりの積み重ねが重要だということが現場の実態 調査から実証できた。教育・保育の現場における大 きな括りとしての環境を捉えた場合、内容は多岐に 渡るが、乳幼児期は生涯にわたる人間形成にとって 極めて重要な時期であるということを鑑みてさらな る質の向上の在り方が問われているのである。

### ③自己評価作成の有用性についての仮説

保育の質の向上のため、これまでの研究から見いだされた課題についてどのような自己評価を作成するのが望ましいだろうか。

保育士等には自らの保育実践を評価するよう努め

ることが求められている。現状では保育現場の業務は多様であり複雑である。それは子どもに対する保育はもとより、子育ての支援として家庭支援へと業務は拡大している。さらには子どもを巡る関係機関との関わりや、記録等の事務作業もある。そのため保育士等の就労時間は長時間になりやすい環境となっているが、そのような状況にあっても保育士等は、質の向上を進めるため、求められるまま日々の業務をこなしている。

このような状況に対して、保育士等の疲弊が最小限となるよう、さまざまな評価方法の提案や自己評価ガイドラインが作成されているが、負担減につながっているとは言いがたいのが実情である。

そこで、さらに取り組みやすく負担感の少ない、継続可能な自己評価ができれば、継続した取り組みに資することにあるのではないか。自ら評価をすることで、より問題意識が高まり、内容理解が進み、取り組み意欲が高まると考えるのである。

評価票の内容としては、(1)保育者が自己評価によって自身の長所短所を把握し課題を自覚できるもの、(2)保育者が自己評価を通して子どもの育ちを把握し見通すことができるもの。(3)保育者が自己評価を通じて仕事に対する満足度が向上し継続した保育従事者となるもの、そして(4)評価の公表により幼児教育の社会的認知を高めることができるもの。といったことにつながるものならば、質の向上等につながる自己評価となるのではないだろうか。

### (2) 先行研究の検討と本研究の位置づけ

### ①先行研究及び既存評価票

これまで本研究会が行ってきた3年間の研究(以下、「先行研究」という)を踏まえ、既存の評価スケール、自己評価票及びチェックリストについて概観すると、評価スケールについては、保育プロセスの質に関する評価が中心であり、全体的な保育の質向上を目指したものである。そのため、評価スケールでは、保育の全体像を観察し、時にインタビューをしながら、第3者が保育者や施設を評価するものであった。

また、自己評価票やチェックリストなどは「認定 こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」「幼稚 園教育要領」を踏まえた教育・保育全般にわたり、 個人や施設を評価することが一般的で、その評価・ チェックは、半日から丸一日かかるようなものが多 く、すべての保育者が交代で評価・チェックを行う ためには、勤務を計画的に変更し、または超過勤務 で対応せざるを得ないなど負担感が大きく、評価の ための評価となる側面があり、その結果を活用する にあたっては、さらなる時間と労力が必要とされる ものであった。

### ②本研究の位置づけと目的

今回私たちが目指したものは、これまで行ってきた3つの「先行研究」をもとに年間指導計画・月間指導計画・週案・日案など日常の業務を充実させながら、保育者がゆとりをもって取り組むことができる評価票の作成である。

先行研究の研究成果を12項目にまとめ、各月で保育者自身で振り返りができる評価票を目指している。また、自己評価をする保育者の負担が少なくなるように項目を選定している。その際、自問自答しながら日々の教育・保育を振り返るために、評価の期間を1か月ごととしている。

新型コロナウイルス感染症という新たな日常生活の脅威の中で、子どもと接する時間以外、会話を控えたり、リモートやSNSを介しての連絡の増加など教育・保育の日常も変わらざるを得なかった。

そのような中で、人と人が直接向き合うコミュニケーションの大切さ、何事もないことの有り難さを感じながら、うれしい、楽しい、喜び合うなどわくわくする振り返りや語り合いを大切にしたいという願いをこの評価票に込めている。

保育の質の向上につながることはもちろんであるが、保育者自身の意欲の向上、日常の教育・保育を通して、保育の計画や記録とつながり、語り合いながら空気感を共有する。また、思わず笑顔になるようなエピソード、胸が躍るような場面を想像し、思い巡らせる。

ありふれた日常の中の人間的で情緒的な営みを楽しむことで、保育者の精神的安定につながり、前向きな心持ちで子どもたちへ寄り添っていく。そして、子どもと保育者が共に主体として、お互いに大切に思う気持ち一慈しみ、愛おしむ一が醸し出される教育・保育が展開されることを期待している。

### 3. 研究の方法

### (1) 自己評価票の作成

### ①作成手順

評価項目を策定するにあたり、先行研究の内容を 抽出することで評価基準の策定が可能となるのでは ないかと考えた。先行研究の対象であった「環境」 を主な評価対象とし、「環境」を3つの分野「人的 環境」・「物的環境」・「言葉かけ等による環境」をもとに考えた。ここでの「言葉等のやりとり環境」は、「人的環境」と同じようであるが、あえて先行研究を意識することとし言葉かけに注目し考えていく事とした。

それを細分化し、各分野において各月4種類の項目を設け、12ヵ月間実施することにより144例の項目での評価が得られる。その評価の内容としては5段階に振り分け、中心化傾向が生じたとしても一定の達成度を捉えることができると考えた。

144項目の策定においては、3つの分野に対してそれぞれに1歳以上3歳未満の5領域が年間を通して各領域につき2~3種類含まれるよう振り分けた。その上で、先ず3つの分野別にキーワードを抽出した。

「人的環境」においてはアタッチメント、スキン シップ、思考力の芽生え、興味・関心・探究心、玩 具を介した人間関係、非認知能力の育ち、家庭保育 と園保育の違い、個々の発達の考慮、情緒の安定、 表情や行動からの気づき、変化への対応の11項目。 「物的環境」においては遊具選択、使用頻度、子ど もの集中度、遊ぶ・する・見る、主体的・対話的な 深い学び、子どもの育ちに合わせた遊具(おもちゃ) の配置・使用、遊具と1対1・保育者の介入・友達 と・保育者と他の子ども、子どもの姿の職員間共有、 季節の変化、年齢や発達に応じた遊具・運動・教 材・素材の選別の11項目。「言葉かけ等による環境」 においては言語活動、非言語活動、言語と行動の関 係性、言葉の数・種類の変化、豊かな語彙力、年齢・ 発達に応じた応答的対応、生活環境の中での文字や 数字、時計、絵本や図鑑など10項目である。

そのキーワードに対して、①「子どもや保育者の 行動・相互作用」、②「通年での共通の問いかけ」 として評価の視点を設定した。

「人的環境」における評価の視点①は、子どもへの意識した関わり・声かけ・接触、子どもからの声かけ、触れ合い、子ども同士の声かけ・触れ合い、職員間の話し合いの効果確認、記憶ではなく記録で評価、関係者の共通理解確認の9項目。「物的環境」における評価の視点①は、計画による設定・改善、狙いと効果、設定内容の把握、物的環境の種類、子どもの反応の5項目とした。「言語かけ等による環境」における評価の視点①は、子どもの使っている言葉の種類、保育者が使っている言葉、保育者から子ども、子どもから保育者、子どもから子ども、ゆったりとした語りかけの6項目。

「人的環境」における評価の視点②は、3歳未満

の見通しを持った計画の立案、子どもの興味・関 心・探究心の把握、遊びを通した子どもへの関わり、 未満児との関わりにおける非認知能力の育ちの理 解・把握、子どもの遊び込む姿の捉え方、0歳児か らの教育の理解の6項目。「物的環境」における評 価の視点②は、設定した保育環境と子どもの発達度 合いの整合性、遊具環境が子どもに与える影響の理 解、子どもの遊びが促進される遊具選択、遊具が持 つ子どもの育ちへの影響理解、遊具遊びをする子ど もの姿からの学びの抽出の6項目。「言葉かけによ る環境」における評価の視点②は、3歳未満におけ る言語環境の理解、子どもとの関わりにおける環境 の理解、保育者からの言語の関わりの分類および意 味付け、非言語的関わり・言語的関わりの展開、非 言語的関わり・言語的関わりの職員間での学び合い の5項目とした。

最終的にこれらのキーワードから次の12の大項目を策定した。

### ②作成した結果

これらの評価項目から導き出された結果により、 保育者の子どもの育ちへの気づき、保育者自身の自己肯定感の向上、若年保育者育成の手がかりへと繋がることを目指し、その到達度が測れるものとして 項目を表す文章を策定した。これらのキーワードから次の12の大項目を策定した。

### 「12の評価項目」

- 1 子どもの興味、関心、探究心について把握して いますか。
- 2 子どもとの応答的な関わりを意識した保育をしていますか。
- 3 子どもの育ちについて記録に残していますか。
- 4 保育についての情報を保育者間で共有していますか。
- 5 物的な環境を効果的に保育に設定できましたか。
- 6 物的環境を通して子どもの自発的な関わりは生 まれましたか。
- 7 保育者は物的環境を通して子どもの育ちを把握していますか。
- 8 子どもの遊び込む姿を捉えることができました か
- 9 子どもの育ちを促すような言葉かけをしていますか。
- 10 言葉かけをするときに、子どもの行動に気をつけていますか。
- 11 子どもの言葉を引き出すとき言葉以外の働きか

け(動作、ジェスチャー等)にも注意していますか。

12 子どもの言葉を引き出すための保育技術の研鑽をしていますか。

この12項目からさらに各月には、細分化した内容 の項目を準備している。例えば「1 子どもの興味、 関心、探究心について把握していますか。」の項目 の4月は「個々の自己主張、感情の表出を受け止め 一人ひとりの子どもの活動の把握が出来ていますか。」となっており、5月には「排せつや食べることなどに興味が持てるようにうまく出来た時は褒めたり、やる気が出来るような関わりをしましたか。」このように毎月違ったものとなっている。

さらにこの12項目を並べてみると、保育者にとっての「子どもの理解」、「援助の工夫」、「保育の研鑽」 とに分類ができる事がわかった。

資料 1 自己評価 年間

番号	教育評価項目	4月	5月	6月	7月	8月
	人的環境評価項目	人的環境評価項目	人的環境評価項目	人的環境評価項目	人的環境評価項目	人的環境評価項目
1	子どものの興味、関心、探究 心について把握しています か。	個々の自己主張、感情の表出 を受け止め一人ひとりの子ど もの活動の把握が出来ていま すか。	一人ひとりの発達に応じた保育が展開出来ましたか。	保育者と一緒に体を動かしたりあそびを発展させましたか。	夏のあそびを取り入れ、保育 者がお手本となり子どもがま ねをする様子がみられました か。	排せつや食べることなどに興味が持てるようにうまく出来 た時は褒めたりやる気が出来 るような関わりをしました か。
2	子どもとの応答的な関わりを 意識した保育をしています か。	保育者との応答的関わりの中 で信頼関係を築いていけるよ う配慮しましたか。	生活の様々な場面で応答的に 関わり、自己肯定感が育つよ うに意識していますか。	スキンシップを大切に一人ひ とりに配慮した保育を展開し ましたか。	子どもの視線に合わせじっく り保育が出来ましたか。	今月の子ども一人ひとりとの 会話や、やり取りが思い出さ れますか。
3	子どもの育ちについて記録に 残していますか。	子どもが特に興味を持ったも のについて記録しています か。	子どもの気持ちの表現について記録していますか。	子どもが周りの人との関わる 様子について記録しています か。	子どもの発語や喃語について 記録していますか。	子どもの生活リズムについて 記録していますか。
4	保育についての情報を保育者 間で共有していますか。	保育についての情報 (こども の言語理解について)を保育 者間で共有しましたか。	保育についての情報 (特に遊 んでいる様子) を保育者間で 共有していますか。	保育についての情報 (こどもの興味)を保育者間で共有していますか。	保育についての情報 (特に子 どもの気持ち)を保育者間で 共有していますか。	保育についての情報 (特に保 育者とのかかわり) を保育者 間で共有していますか。
	物的環境評価項目	物的環境評価項目	物的環境評価項目	物的環境評価項目	物的環境評価項目	物的環境評価項目
5	物的な環境を効果的に保育に設定できましたか。	子どもが様々な素材に触れることができるよう心がけましたか。	自分のものと人のものとの区 別がわかるように配慮しまし たか。	子どもが相手の話す言葉に気づいて、聞くことができるような関わりができましたか。	散歩や戸外遊び等で、天候や 温湿度計を見ながら、帽子を かぶることや水分補給に配慮 できましたか。	(動物、植物、昆虫など)身 近な生き物と関りを持つこと ができるよう配慮できました か。
6	物的環境を通して子どもの自 発的な関わりは生まれました か。	身の回りの人や物に気づき 徐々に関わりをもつような遊 びができましたか。	様々なものに興味や関心を持 つことができるように援助で きましたか。	遊びが豊かになるように一人 ひとりの様子を観察できまし たか。	道具を使って遊んだり食事を 楽しめる環境を整えることが できましたか。	ー人ひとりの興味・関心を考 えながら遊具(おもちゃ)を 準備しましたか。
7	保育者は物的環境を通して子 どもの育ちを把握しています か。	周りの人と親しみながら、発達を引き出すような生活を心掛けることができましたか。	遊具(おもちゃ)を通してそれぞれに応答的な関わりができましたか。	一人ひとりの表情、動作や発 語等の様子を観察し、状況に 応じた対応を心掛けました か。	遊びで使用する道具 (画材等) は安全に配慮したものを 準備できましたか。	実際の活動を振り返り、思わずくすっと笑うような別の展開や対応を追体験しながら言語化することができましたか。
8	子どもの遊び込む姿を捉える ことができましたか。	新しい保育室に親しんでいけるよう寄り添うことができましたか。	生活の中で様々な感触に気づいたり感じたりできるような 配慮ができましたか。	子どもが周りの環境に気づき、関わりを持とうとする姿を捉えることができましたか。	親しみを持って接することが できるような雰囲気をつくる ことができましたか。	午睡は換気に気を付けなが ら、季節に応じた快適な室温 となるよう配慮しましたか。
	言葉かけ等による環境	言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目
9	子どもの育ちを促すような言 葉かけをしていますか。	言語の獲得と感情の表出につ ながっていくことを意識しま したか。	体み明けの情緒不安定な気持 ちを受け止め言葉などで代弁 しながら対応しましたか。	指差しや喃語などに対して応 答的な関わりが出来ました か。	生活に必要な簡単な言葉に気付くよう配慮しましたか。	言葉を引き出すような関わり ができましたか。
10	言葉かけをするときに、子ど もの行動に気をつけています か。	身振りや模倣などから日常に 使う言葉や挨拶を促しました か。	言葉で伝えようとする気持ちを大切に思いを汲み取った対応をしましたか。	一人ひとりに十分な語りかけ ができましたか。	おむつ交換や排泄を促すとき など心地よくなる言葉かけを しましたか。	自然の変化に対して興味が持 てるような声掛けをしました か。
11	子どもの言葉を引き出すとき 言葉以外の働きかけ(動作、 ジェスチャー等)にも注意し ていますか。	ことばが日々増えていること を認識して関わりましたか。	散歩のときは子どもが指差し したものに言葉を返しました か。		遊びの中で友達との言葉のや り取りが出来るよう保育者が 仲立ちになっていますか。	絵本の読み聞かせで季節を感 じるような体験ができました か。
12		保育者の言葉かけを通して、 子どもたちの非言語的な活動 がさらに広がり成長とともに 変化してきましたか。	かけだけで行動できない子に			時間にゆとりを持って語りかけができましたか。

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
人的環境評価項目	人的環境評価項目	人的環境評価項目	人的環境評価項目	人的環境評価項目	人的環境評価項目	人的環境評価項目
あそびの中に運動会を意識した体を動かす触れ合い遊びを取り入れましたか。	深まりゆく秋を感じなが ら、子ども達の興味、探 索活動を意識した保育を 行いましたか。	異年齢児への興味や自分 以外の存在に気付き関わ れるように促すことがで きましたか。	子ども一人ひとりの姿と 集団での姿を見守りなが ら、子ども達の成長を見 守りましたか。	子ども同士の言葉や動作 での関わりの中で互いに 成長しあう姿が見られて ますか。	子どもたちは、温かく受容 的な関わりを通じて自分を 肯定する気持ちが育ってい ますか。	1年を振り返って子どもの 興味、関心、探求心の把握 が出来ましたか。
子どもとの応答的な関わりを意識した保育が出来 ていますか。	あそびを通して言葉のや り取りなど応答的に関わ れましたか。	子どもからの働きかけや 様子を踏まえ、楽しく過 ごせるよう配慮しました か。	子ども一人ひとりの気持 ちを受容し、共感しなが ら保育を行っています か。		保育者との関わりの中で安 心し探索活動が行えていま すか。	1年を振り返って子どもと の応答的な関わりを意識し た保育が出来ましたか。
子どもの探索活動につい て記録していますか。	子どもの歌ったり踊った りする様子について記録 していますか。	子どもの友達とのやり取 りについて記録していま すか。	子どもの言語理解につい て記録していますか。	子どもの食べる様子について記録していますか。	子どもがおもちゃや教材で 遊ぶ様子について記録して いますか。	1年を振り返って子どもの 記録から色んな育ちが読み 取られるものになっていま すか。
保育についての情報(特に人の話を聞く様子)を 保育者間で共有していますか。	保育についての情報 (特に生活のリズムについて)を保育者間で共有していますか。	保育についての情報 (特にこどもの自ら関わる様子)を保育者間で共有していますか。	保育についての情報 (特に歌ったり踊ったりする様子)を保育者間で共有していますか。	保育についての情報 (特に他人との関わり)を保育者間で共有していますか。	保育についての情報 (特に 言葉での伝え合い) を保育 者間で共有していますか。	保育についての情報 (特に 食べる様子)を保育者間で 共有していますか。
物的環境評価項目	物的環境評価項目	物的環境評価項目	物的環境評価項目	物的環境評価項目	物的環境評価項目	物的環境評価項目
子どもが刺激されて制作 する環境を整えることが できましたか。	今月の遊びの中で、子ど もたちが関わりながら、 興味・関心を持ったもの を振り返ることができま したか。	言葉かけや応答的な関わりで子どもの玩具や道具への興味を促すことができましたか。	手洗いなどの習慣を身に付けられるように声をかけ、促すことができましたか。	一人ひとりの年齢や興味・関心に応じた遊具で 遊ぶことができるよう準備できましたか。	子どもが遊ぶ姿をイメージ して生活や遊びの用意がで きましたか。	一人ひとりの興味・関心を 見守り、なぜその遊具(お もちゃ)を用意するか考え ながら準備できましたか。
遊具(おもちゃ)は、音 質、形、色、大きさなど 園児の発達の状態に応じ たものを選ぶことができ ましたか。	大きさ、形、原料など口 に入れても安全な遊具 (おもちゃ)を準備でき ましたか。	歌ったり手遊びなどをす るときに、遊びが広がる 道具を取り入れました か。	子どもが遊びの中で周囲 の環境に関わることがで きるように配慮できまし たか。	遊びが豊かになるように 一人ひとりの表情や仕草 を観察することができま したか。	遊びを通して嬉しさや楽し さといった感情を表すこと ができるように配慮できま したか。	子どもが自ら周りに働きかけながら、共に楽しむ工夫をすることができましたか。
子どもが遊びの中で自分 でしようとする気持ちを 尊重することができまし たか。	遊びや行事等で使用する 道具を生活の中で伝えた り興味が持てるように配 慮できましたか。	身体を動かす題材を準備 するなど運動あそびをす る楽しみが膨らむ工夫が できましたか。	(動物、植物、昆虫など) 身近な生き物に気付く機 会を整えることができま したか。	一人ひとりの様子を観察 し、子ども自身が考えて いることを楽しむことが できるように心掛けまし たか。	遊びの中で試行錯誤したり 繰り返し楽しんだりする姿 を捉えることができました か。	実際の活動を振り返り、一 人ひとりの表現を楽しみな がら、気持ちを通わせるこ とができましたか。
避難訓練等で、避難の合図がわかったり、避難の仕方などが経験として積み重ねられるような援助をしましたか。	一人ひとりの状況に応じて体を十分に動かす機会を設けることができましたか。	遊んでいる姿が、身近な 人と関わる心地よさを感 じるものになりました か。	子どもの姿を観察し、興味・関心や発達に応じた 遊具(おもちゃ)を用意 できましたか。	子どもの姿を通した興味・関心に沿いながら、 身体を十分に動かすこと ができましたか。	季節の行事や生活を楽しめ るような働きかけができま したか。	生活や遊びを通した活動で 見せる子どもの表現の違い を捉えることができました か。
言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目	言葉かけ等環境評価項目
「こと」「もの」の名前な どを伝え、言葉のやりと りを促していきました か。	保育者との言葉のやり取 りを通じて自分の体を意 識できるよう促すことが できましたか。	言語の獲得と感情の表出 につながっていくことを 意識しましたか。	言葉で伝えようとする気 持ちを大切に思いを汲み 取った対応をしました か。	指差しや哺語などに対し て応答的な関わりが出来 ましたか。	生活に必要な簡単な言葉に 気付くよう配慮しました か。	時間にゆとりを持って言葉かけができましたか。
絵本の内容から繰り返し の言葉を拾い、園児が模 倣できるよう促しました か。	保育者や友達とのやりと りを通して語彙力がたか まることを意識しました か。	絵本を通して、しりとり 遊びを楽しめましたか。	休み明けの情緒不安定な 気持ちを受け止め言葉な どで代弁しながら対応し ましたか。	親しみを持って日常の挨 拶に応じましたか。	絵本を読むときはどれがい いか聞く機会を設けました か。	保育者や友達とのやりとり の中で言葉を使うようにな る働きかけができました か。
言葉のやり取りを行える 機会を設け、音楽やリズ ムから言葉を親しむよう 促しましたか。		言葉やジェスチャーを交 えて子どもと関わりまし たか。	こどもが「やりたい」「が んばろう」と思うような 声掛けをしたましたか。	一人ひとりに十分な語り かけができましたか。	おむつ交換や排泄を促すと きなど心地よくなる言葉か けをしましたか。	自然の変化に対して興味が 持てるような言葉かけをし ました。
日常の中での数字などに 興味が湧くように言葉か けを行いましたか。	絵本の読み聞かせから言 葉による表現を促しまし たか。	言葉をゆっくりはっきり 伝え、言葉が出るよう意 識して関わりましたか。		差ししたものに言葉を返	遊びの中で友達との言葉の やり取りが出来るよう保育 者が仲立ちになっています か。	絵本の読み聞かせで季節を 感じるような体験ができま したか。

# (2) 自己評価の実施

令和3年4月に保育総合研究会会員園へ自己評価 実施協力依頼を行い、協力を受託してくれた園に対 して、「自己評価チェックシート」を送付の上、実 施した。尚、回答者は協力園のうち、3歳未満児を 担当している保育者とした。

・対象園 保育総合研究会会員の協力園 17園

- ・実施期間 令和3年4月~令和3年8月
- ・回答者 17園延べ112名
- ・実施方法

協力園に対して、3(1)で作成した「自己評価票」を配布し、実施期間における各月ごとに12項目(3(1)②参照)に対して1~5の5段階(5が最も良い)で自己評価して貰った。

# 資料2 自己評価 4月

4月の教育・保育の振返り

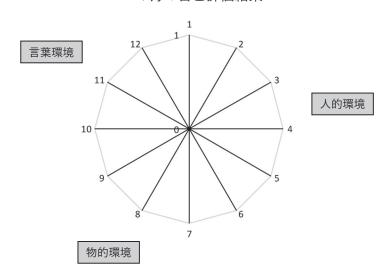
園名

記入日 令和 年 月 日 クラス 記入者

4月の保育はどんな感じでしたか。以下の設問を 5 段階で評価してみてください。評価欄のみ記入をお願いします。

		よくできた	まあまあできた	ふつう	できなかった	わからない	評価欄
1	個々の自己主張、感情の表出を受け止め一人ひとりの 子どもの活動の把握が出来ていますか。	1	2	3	4	5	H I III
2	保育者との応答的関わりの中で信頼関係を築いていけ るよう配慮しましたか。	1	2	3	4	5	
3	子どもが特に興味を持ったものについて記載していますか。	1	2	3	4	5	
4	保育についての情報(こどもの言語理解について)を 保育者間で共有しましたか。	1	2	3	4	5	
	物的環境評価項目		•				
5	子どもが様々な素材に触れることができるよう心がけましたか。	1	2	3	4	5	
6	身の回りの人や物に気づき徐々に関わりをもつような 遊びができましたか。	1	2	3	4	5	
7	周りの人と親しみながら、発達を引き出すような生活 を心掛けることができましたか。	1	2	3	4	5	
8	新しい保育室に親しんでいけるよう寄り添うことがで きましたか。	1	2	3	4	5	
	言葉かけ等による環境						
9	言語の獲得と感情の表出につながっていくことを意識 しましたか。	1	2	3	4	5	
10	身振りや模倣などから日常に使う言葉や挨拶を促しま したか。	1	2	3	4	5	
11	ことばが日々増えていることを認識して関わりましたか。	1	2	3	4	5	
12	保育者の言葉かけを通して、子どもたちの非言語的な 活動がさらに広がり成長とともに変化してきましたか。	1	2	3	4	5	

# 4月の自己評価結果



# (3) アンケート調査の実施

上記自己評価に協力頂いた園に対し、アンケート の依頼を行った。

- ・対象園 上記自己評価を実施した17園
- ・回答者 11園延べ81名
- ・実施方法

下記内容について選択及び記述形式で回答をし て貰った。

1. 保育の経験年数及び0~2歳児の経験年数 について

- 2.(1) 自己評価による自身の保育の傾向への 気付き
  - (2) 自己評価が子どもの育ちに役立ったか
  - (3) 自己評価を通じて仕事に対する満足度 が向上したか
- 3.(1) 現在各園にて行っている自己評価の実 施形態及び頻度について、また、評価 結果の回答について
  - (2) 今後どのような自己評価があったら良 いか

料3	
令和3年度保総研保育科学研究アンケート ※各園でまとめてお答えください。	
<ol> <li>今回自己評価に取り組んでいただいたみなさんについてお聞きします。</li> <li>(1)保育の経験年数(通算)についてご記入ください。</li> </ol>	
・3年未満 (名)・3~5年 (名)・5~10年 (名)・10~15年 (名)・15年以上 (名) (2)0~2歳児の経験年数	
・3年未満 (名)・3~5年 (名)・5~10年 (名)・10~15年 (名)・15年以上 (名)	
<ul><li>2. 今回研究で実施した自己評価についてお聞きします。</li><li>(1) 自己評価によって自身の保育の傾向について気づきはありましたか。</li></ul>	
<ul><li>・あった(名)・少しあった(名)なかった(名)・わからない(名)</li><li>(2)自己評価は子どもの育ちを把握することに役立ちましたか。</li></ul>	
・役だった (名)・少し役だった (名)・役立たなかった (名)・わからない (名)	
(3) 自己評価を通じて仕事に対する満足度が向上しましたか。	
・向上した (名)・少し向上した (名)・向上しなかった (名)・わからない (名)	
<ul><li>3. 各園の自己評価についてお聞きします。</li><li>(1) あなたの園ではどのような自己評価を行っていますか。</li></ul>	
①実施形態についてお答えください。(複数回答可です) ・明文化した評価票がある ・口頭で回答する(面談等) ・共通様式がある ・個別で回答している ・既製のものを利用している ・自園オリジナルの調査票を利用している	
・その他特徴的な取組等あればお答えください(	
②実施頻度についてお答えください。     ・年 回程度    ・月 回程度    ・週 回程度    ・毎日     ・その他( )	
③評価結果の活用についてお答えください。(複数回答可です) ・集計して公表 ・個人で把握 ・園内で共有 ・改善活動に利用	
<ul><li>その他(</li></ul>	
(2) 今後どのような自己評価があったらいいかご意見をお聞かせください。	
ご協力ありがとうございました。	

### 4. 調查結果

### (1) 自己評価の結果

### ①調査の概要

今回の調査では、17施設で、0歳~2歳クラス担 当職員118名から回答を得た。回答者が担当してい るクラスは、それぞれの施設の保育状況や人員配置 の関係により、下表のような様々な形態が見られた。

### 子どもの年齢別評価結果

(単位:人)

0歳	0•1歳	1歳	2歳	フリー	その他	合計
30	7	38	35	6	2	118

回答者の保育経験および3歳未満児を担当した経 験年数については次の表の通りである。

保育経験

未満児経験

■3年未満 ■3~5年 ■5~10年 ■10~15年 ■15年以上

■3年未満 ■3~5年 ■5~10年 ■10~15年 ■15年以上

### 自己評価の傾向

自己評価の集計結果を職員による回答割合でみてみると、「よくできた」が20%、「まあまあできた」が42.3%、「ふつう」が30.6%、「できなかった」が5.6%「わからない」が1.5%未満という結果となった。

### 回答結果



■よくできた ■まあまあできた ■ふつう □できなかった □わからない

各施設の職員の回答割合別に施設の数を見てみると、施設の職員の10~30%が「よくできた」と回答した施設は13施設でもっとも多く、施設全体の76%を占めている。また職員の40%以上が「まあまあできた」と答えた施設は9施設、30%以上で17施設だった。また、「ふつう」では8施設で20~30%が最も多い結果となった。そして「できなかった」や「わからない」は10%未満という結果となった。

### 協力園の集計結果

(景数)

						(1111/20)
回答割合 (%)	よくできた	まあまあ できた	ふつう	できなかった	わからない	合計
0~10	1			16	17	34
10~20	6		4	1		11
20~30	7		7			14
30~40	2	8	3			13
40~50	1	5	2			8
50~		4	1			5
合計	17	17	17	17	17	85

### ②回答結果から読み取れること

この研究のアンケート及び研究結果から見えてきた保育に欠かせない評価ポイントを抽出し、新たな視点から保育の評価基準を考えていくことで、実践的に保育者の日常の保育を振り返ることができる評価項目が出来ないかと考えた。その自己評価を3歳未満児の保育者が行った結果見えてきたものを検討したい。

### 1)人的環境

「よくできた」から「できた」にかけて多く回答している。

日常の保育において保育者が子どもの興味関心に 寄り添い、応答的な保育をしていると自覚している 保育者が多い結果と言える。また、乳児保育におい ては、多くの園が複数保育士で保育を担任しており、 一人で記録評価をするのではなく、複数の保育者が 連携を取りながら子どもの育ちを支えていく必要が あると考えているのが読み取れる。

### 2) 物的環境

「できた」から「ふつう」にかけて多く回答している。

設備やコーナー保育の設定等ハード面の環境を整えるのは難しい部分であり、個々の子どもの特性を考慮してハード面の環境を整えることは難しいであろう。保育者は、保育において、おもちゃなどの年齢に適した玩具を選定したり、子どもの興味に沿って環境を整える努力をしているが、物的環境を子どもの興味関心に沿って整えていくのは難しいと感じている保育者は多いのではないかと結果から窺える。

### 3) 言葉かけ等による環境

3項目の中で一番「よくできた」から「できた」 の項目に回答している保育者が多い。

乳児期は語彙が爆発的に増えていく大切な時期であり、意識して言葉かけをしている保育者が多いのだろう。また、言葉だけでなく動作やジェスチャー

など働きかけを意識して行っていることが多く、子 どもの言葉を引き出す努力を日々していることが分 かる。

最近では、子どもを取り巻く環境が大きく変化し、父母のみで子育てをしている家庭が多く、言語的な環境が乏しいと感じている保育者も多いのであろう。保育園・こども園に入園して言葉が初めて出たり、語彙が増えたり会話のバリエーションが広がったりする子どもも多いことが日々の現場からも感じている。

### ③3つの視点による回答結果

次に、自己評価票の設問項目について、分析の視点として、3つの項目を設定して集計した。3つの視点とは、「子ども理解」「援助の工夫」、そして「保育研鑽」である。

「子ども理解」とは保育者が保育をするにあたって、子どもの興味や関心、探究心、あるいは遊び込む姿や行動について、子どもをどのように理解するかという視点であり、「援助の工夫」とは、応答的な関わりや見通しをもった環境設定、あるいは言葉かけや非言語的な関わりについて意識しているかを見る視点であり、「保育研鑽」は、記録や保育者同士の情報共有、保育技術の向上等の取組についての視点として設定したものである。項目の内容や数については次表の通りである。

### 評価項目の分類

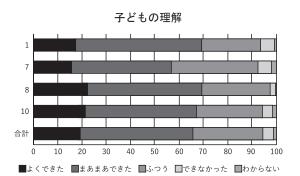
番号	評価項目	子ども理解	援助の工夫	保育研鑽
1	子どもの興味、関心、探究心について把握 していますか。	0		
7	保育者は物的環境を通して子どもの育ちを 把握していますか。	0		
8	子どもの遊び込む姿を捉えることができま したか。	0		
10	言葉かけをするときに、子どもの行動に気 をつけていますか。	0		
2	子どもとの応答的な関わりを意識した保育 をしていますか。		0	
5	物的な環境を効果的に保育に設定できまし たか。		0	
6	物的環境を通して子どもの自発的な関わり は生まれましたか。		0	
9	子どもの育ちを促すような言葉かけをして いますか。		0	
11	子どもの言葉を引き出すとき言葉以外の働きかけ (動作、ジェスチャー等) にも注意していますか。		0	
3	子どもの育ちについて記録に残していますか。			0
4	保育についての情報を保育者間で共有して いますか。			0
12	子どもの言葉を引き出すための保育技術の 研鑽をしていますか。			0

設問の順番は、実際の自己評価票を3つの設定項目で並び替えたものである。

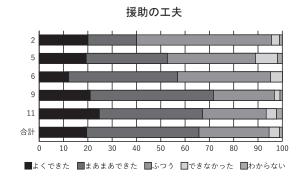
「子ども理解」が4項目、「援助の工夫」が5項目、 「保育研鑽」が3項目の計12項目である。

3つの項目についての回答結果は次のようになった。

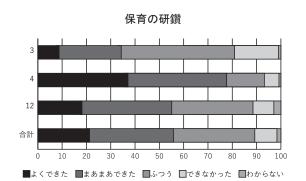
まず、「子ども理解」においては、4つの項目の合計では、「よくできた」と「まあまあできた」の合計が65.6%、「ふつう」が28.9%、「できなかった」4%、「わからない」1.4%という結果になっている。「子ども理解」を構成する4つの小項目では、他の項目に比べて、自己評価が比較的低い項目は7の「保育者は、物的環境を通して子どもの育ちを把握していますか」がいくぶん低い結果となった。



次に「援助の工夫」の合計については、「よくできた」と「まあまあできた」の合計が63.5%、「ふつう」が30.3%「できなかった」4.6%、「わからない」1.5%という結果になっている。小項目では、9「子どもの育ちを促すような言葉かけをしていますか」、2「子どもとの応答的な関わりを意識した保育をしていますか」が高く、5「物的な環境を効果的に保育に設定できましたか」、6「物的環境を通して子どもの自発的な関わりは生まれましたか」が低い結果となった。



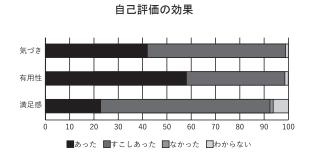
最後に「保育研鑽」については、「援助の工夫」 については、「よくできた」と「まあまあできた」 の合計が55.9%、「ふつう」が33.3%、「できなかっ た」9.2%、「わからない」1.7%とう結果になっている。小項目では、他の視点と比べて評価が低いが、特に3「子どもの育ちについて記録に残していますか」が低く、逆に4「保育についての情報を保育者間で共有していますか」は高くなっている。



## (2) アンケート調査結果

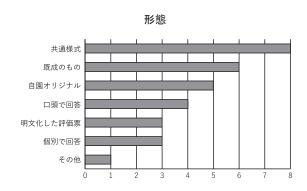
自己評価に回答いただいた回答者に対し、調査実施に対する所感、回答園の評価体制についてアンケートを実施し、11施設から回答を得た。

内容については、まず今回の自己評価票を使用することで得られた効果についてみると、気づきについては、「あった」「すこしあった」と答えた割合は80%で、「なかった」は0%、「わからない」が1.2%という結果であった。また、有用性については「あった」と「すこしあった」が98.7%「なかった」が0%、「わからない」1.2%で、満足感については、「あった」「すこしあった」が92.5%、「なかった」1.3%「わからない」6.3%と言う結果となった。

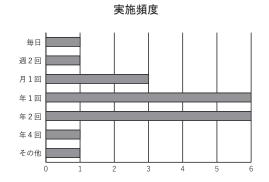


次いで、各施設において通常実施している自己評価あるいは施設評価について設問し、回答を得た。

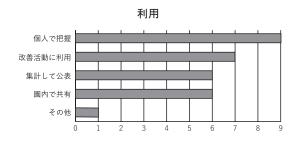
まず、自己評価の形態については、共通様式を用いての実施が最も多く、次いで既成の評価票を用いた評価、自園独自の評価票を作成しての実施とつづく。また、明文化した評価票に限らず、口頭による実施を行っているなど、多様な評価が実施されていることが伺える結果となった。



次に実施頻度をみると、年1回から年2回の実施 が最も多く、年に複数回の実施や毎日実施している 施設もある。



そして自己評価を実施して得られた結果をどのように利用しているかについては、個人での把握や施設全体を集計して公表する、あるいは園内で共有する、改善活動に利用するといった取り組みにつなげられている。



まとめると、回答施設の自己評価の実施状況及び活用は、共通様式を用いて、年に1~2回から数回程度実施している。実施した結果については、評価した個人が自己改善に用いるほか職員間で共有し、施設全体で改善活動に用いていると共に、公開し施設の状況を伝えることに努めている、という状況を伺うことが出来る。

今後どのような自己評価があったら良いかの設問 にたいして

- ・設問数が少なくチェックすると評価する側にも視 覚で自己評価の結果をみることができ今後の自己 評価を行う際の参考になった
- ・これまでの記述式の時間のかかる自己評価ではなく、チェックを入れるだけの事務量の少ない内容のため取り掛かりやすく前向きな気持ちで行うことができた。また記録後の保育につながる評価だった(保育の見直し)
- ・月別に評価項目が変化しているため、子どもを観る視点を変えたり、配慮を工夫することができ翌月にいかすことのできる自己評価になっていると思う
- ・自己評価後レーダーをみることで、できていること
- ・自分に足りないところなど気づきにつながり今後 の保育実践にいかすことができた。3歳未満児だ けでなく3歳以上児の自己評価があれば活用した い
- ・傾向に沿った改善方法や具体的な取り組み方法が あれば園内研修の際活用したり指導の際いかすこ とができると思う

- ・設問の中に"保育者自身がその月又はその年の保育を楽しむことができたのか"などの項目が入っていても良いのではないかと感じた
- ・自園で年2回行っている自己評価とは違い毎月評価を行う必要はあるものの、簡単に記入ができ、 自分に足りないところがわかりやすく翌月にいか しやすい評価シートだった

といった意見があった。

## (3)総合考察

### ①結果から読み取れること

自己評価結果とアンケートから読み取れることから考えられることをまとめる。

まず、自己評価の項目で「よくできた」「まあまあできた」そして「ふつう」の3項目は「できた」を細分化し評価の水準を表したものと捉えることができるので、この3つの項目から、評価者の項目に対する程度を読み取ることができる。そのようにみたとき、項目で評価のばらつきがみられた。より高評価のものと低く評価されているものに共通点があるだろうか。

### 表 自己評価結果の評価結果

	評価が高い項目			評価が低い項目		
子どもの 理解	1	子どもの興味・関心・探究心について把握し ていますか	7	保育者は、物的環境を通して子どもの育ちを 把握していますか		
援助の工夫	9	子どもの育ちを促すような言葉かけをしていますか 子どもとの応答的な関わりを意識した保育を していますか	5 6	物的な環境を効果的に保育に設定できましたか 物的環境を通して子どもの自発的な関わりは 生まれましたか		
保育研鑽	4	保育の情報を保育者間で共有していますか	3	子どもの育ちについて記録に残していますか		

上記からは、子どもや職員との直接的な関わりへの評価が高く、物的環境を通した理解や関わりへの評価が低い傾向にあることがわかる。無論今回の結果は限られた対象で調査のための自己評価であるため、結果の一般化はできないが、簡易な方法で実施した自己評価であってもある程度の傾向の把握は可能であるということは言えるであろう。

また「わからなかった」ついては、設問について、 自身ができたかどうかわかならかったのか、設問の 意味するところがわからなかったのかは不明である が、ともかくも判断しづらい設問だと感じたものと 思われる。

また今回の調査は4月から8月までをまとめて評

価してもらったものであり、継続的な取り組みとしての結果ではないが、現在の状況を可視化することで、大枠での自己把握を実感することができるものとなった。

つぎに自己評価の有効性と指向性について俯瞰する。アンケート結果で明らかになった自己評価の実施による自身の気づきや満足度、あるいは自己評価の有用性についてはおおむね肯定的な捉え方が見られた。また自由記述の感想には、簡易な評価票により業務負担が減ったこと、チャート図により視覚的な理解が進んだこと等が挙げられており、取り組みやすいとの声があった。このことから、保育者の身近にあり簡素化され視覚化された評価票が整備され

ると、より活用が高まる可能性があることと考えられる。

3つめに回答園における自己評価の位置づけの傾向を把握する。年間を通して実施されている自己評価ではあるが、取組みには負担感も存在している。これを解決するために評価内容を工夫することで、負担感の軽減に影響を与えることができ、自己評価の取組を促すことにつながるのではないか。

### ②求められる自己評価について

2008年(平成20年)3月に告示された「保育指針」において「『保育の内容等の自己評価』として、保育士等は自らの保育実践を評価するよう努めること。」と記載され自己評価の実施が明確化され、同年文部科学省より「幼稚園における学校評価ガイドライン」が示され、さらに2020年(令和2年)3月の「自己評価ガイドライン」では、自己評価の取り組みを進め保育の改善・充実を図るとともに、一人ひとりの保育士等の資質・専門性や職員間の協働性をより高めていくことが求められ、ますます自己評価の必要性が示されている。

また自己評価に取り組む過程での保育者間の対話・交流や結果の公表を踏まえて、保護者や地域社会と保育についての理解が共有されることが望まれ、保育内容等の自己評価に関する一連の取り組みを通じて、日々の保育がより充実したものとなることがこれからの保育に求められている。

では、現場における自己評価の位置づけとは何な のかを再度考えてみる。

まず、自己評価とは、自分で自分を評価するためのものであり、自分の良かった点や悪かった点を振り返ることにより、自分の成長につなげることが可能となる。定期的な自己評価は、自分自身の保育を再確認する機会となり、また自己評価することにより自身の保育を客観的に見つめ、振り返る気づきの機会にもなり得る。

そしてそのためには日々の保育を通しての評価であることがより求められてくる。1年に2~3回等と間隔をおく自己評価ではなく日々の評価となるよう、ひと月ごとに自己評価をし、改善点や反省点、良かった点を次の月に繋げることができるよう月単位の自己評価とすることが理想となる。

自己評価の方法とその特徴としては①チェックリスト形式、②文章化、対話式があるがチェックリスト形式のあらかじめ設定した評価項目に照らして保育の実態状況や目標の達成状況等について段階や数値で示す方法を基本とし、その中に文章化、対話式

の特徴である職員間での語り合いの項目も含めて両 者を組み合わせてのチェックリスト形式が理想と考 えられる。

また自己評価をすることが負担とならないよう、 設問数が少なくかつ適切な質問でチェックしそれが レーダーに表れて視覚でも結果が分かることが望ま しいと思う。

このようなチェックリストでの自己評価を自己の保育の良し悪しを判断するためだけではなく、子どもの健やかで豊かな育ちに向けた保育を目指すためのものになり、保育の計画や実践の質を確保・向上していくための取り組みであるという職員間での共通理解の下で行わなければならない。

よってこのような保育の振り返りを通じて、子どもの生活や育ちの実態を改めて把握するとともに、保育の改善・充実を図っていくという循環が日常的な保育の過程として常に繰り返され、自己評価を通し園の資質が向上し園と保護者と保育についての理解が共有され、両者の連携が促進され、日々の保育がより充実したものなるよう配慮していきたい。

### 5. おわりに

本研究は、「3歳未満児における保育内容の評価に関する研究~人的環境・物的環境・言語環境の研究から見えたものを土台として~」ということで3年の月日を費やし、これらの3分野を中心にアンケート及び研究結果から見えてきた保育に欠かせない評価ポイントを抽出し評価票を作成した。

過去3年間の研究からも見えてくるが、3歳未満 児における教育・保育の環境は生涯における人間形 成に大きな影響を与えている。この事から乳幼児施 設は常に保育の現状を確認しより良い保育がなされ ることを目的に保育の質に関する具体的な評価基準 の下、継続的に自らを評価し保育の質を向上する必 要がある。

本年度は、3歳未満児における評価基準(項目)を作成し、これらの評価基準(項目)から導きだされた結果により、保育者の子どもの育ちへの気づき、保育者自身の自己肯定感の向上、若年保育者育成の手がかりへ繋がることを目指した。その到達度が測れるものとして、「12の評価基準(項目)」を策定し、さらに細分化し各月にあわせた評価基準(項目)を並べてみると保育者にとっての「子どもの理解」「援助の工夫」「保育の研鑽」とに分類ができることがわかった。

自己評価をする保育者の負担が少なくなるように

12項目を選定し、自問自答しながら日々の教育・保育を振り返るために、同じ項目でも月により違ったものとなっている。

実際に自己評価のアンケートを行っての感想にもあるように「チェック」を入れるだけで項目も少なく、「レーダー」に現れるので視覚で自己評価の結果を見ることができ、翌月の保育にいかすことができる。今回の自己評価票の記入をすることにより、自分の保育の見直しとともに、毎月保育者同士の話し合いや記録をとる事が評価項目となっている為、自分だけでなくチームで保育を考えるきっかけとなっているように思う。同僚とコミュニケーションを取りながら、他者の意見や考え方にも耳を傾け明日の保育へと導きだしている。これらのことは、保育者自身の向上とともに園全体の保育力の向上にも繋がっているのではないだろうか。今回は実施期間も

短く、協力園も少なかったため、より良い「自己評価票」を作成するためには、多くのデーターを収集する必要がある。より多くの協力園をつのり、自己評価することにより自分の保育の見直しとともに子どもたちが健やかで豊かな育ちになるような保育を目指すための指標となっていくことを切に願うものである。

### [参考文献]

- ·保育所保育指針
- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領
- ・日本保育協会「保育科学研究」第8巻、9巻、10巻
- ・保育所における自己評価ガイドライン (2020年改訂 版 参照)
- ・埋橋玲子「新・保育環境評価スケール②」法律文化社